

大家說戲演說

法藏館藏版

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 同 | 一 | 同 | 擬 | 嗣 | 文 |
| 等 | 等 | 同 | 講 | 講 | 學 |
| 師 | 師 | 同 | 同 | 同 | 士 |
| 補 | 小 | 同 | 吉 | 雲 | 南 |
| 同 | 栗 | 同 | 谷 | 英 | 條 |
| | 栖 | | 覺 | 晃 | 文 |
| | 香 | | 壽 | 耀 | 雄 |
| | 頂 | | | | |
| 師 | 師 | 師 | 師 | 師 | 師 |
| 說 | 演 | 說 | 說 | 說 | 說 |
| 教 | 說 | 說 | 教 | 教 | 教 |

多田了和編輯

緒言

昨年篤志の人々相計りて大谷派の名師を請じ三

河豊橋別院に於て、或は軍人の爲め、或は俗衆の爲

め、一説教講談を聞けりと數回、予は法務を操替へ

て、其の毎に傍聽し、失忘し備へんとて一々筆記し

て、其の深遠、説示の懇篤、是を予一人玩味し

て、喜ぶも惜しき思ひ、折々諸々の雜誌に寄送し

て、其の益を以て、軍人説教も續いて開き兼ねる場合に至りたれば、

聊か後の紀念にもと思ひ、且は此の美舉を企てた

る人々の篤志も報はん爲め、小冊子に印せんと

す



て、稿を集めて一篇を成せり、偶法藏館主西村氏これと刊行せんとを求めければ、今その意に任せ「大家説教演説」と題して世に公す、幸に讀む者の多くして令法久住の一助ともあらば、満足に至りなり、讀者之を諒せよ、

明治廿五年七月京都客舎の窓下

佛子 釋了和多田姓 誌

大家説教演説

○軍人説教(明治廿五年一月十九日)

文學博士 南 條 文 雄

軍人説教

見眞大師の御言に信トハ疑フコ、ロナキナリトある。又た軍人へ下さ
れた勅諭の中に「軍人ハ信義ヲ尊ムベシ」と云ふ個條もある。信は人間
になくてならぬ所の寶である。
私は名古屋に於て昨日と軍人説教を致せしが、私は皆サンの身体の御
世話を致すことはできぬが、皆サンの心の御世話は私が致さねばなら
ぬ。心に病おれば這入らねばならぬ病院は名古屋に出来てある。ソコに
入院して居る病人に私が匙加減よて薬を調合したることも度々ある。夫
に就て一つの話がある。一昨年六月十日劉潮と當地にて御話を致した。
其節劉潮の演説する間私は控席に居た。スルと取次が何等軍曹某どの
名刺を出し、且の曰へるには豫て名古屋に於て御世話を蒙りし御禮に

参りたれば面會を願ひ度ひと申せしとの故早速面會致した所が更に其人の容貌に見覺へは赤いけれども其軍曹の話と聞けば私も師の御話に感じました其感じました所が自分斗りでなく他人まで及ぼしたとがありました私は曾て心の病を煩ひて夫を治す病院へ這入ました夫を出るときに大いに其効益を得たとがありますと述るゆへ段々其話を聞くに他のとにては赤かつた豫て私が名古屋にて演説して佛敎は一口に云へは轉迷開悟の四字に収まる其轉迷開悟に就ては安心が肝要である例へば此道を行は行けると云のと此道を行て見て往かねば戻ると云のと足の踏出は何れが安心であるか因果の道理を明に知て三世は實に因果であると豫て行先の道筋を心得る方が安心よは非ずや過去の因を知らんと欲せば現在の果を見るへし未來の果を知らんと欲せば現在の因を見るへしと云ふ格言もある皆さんは軍人の身体去れど此身体は親より貰ひしもの是だけのもといへば夫迄な

れども私は軍人といふ肩書あるゆへ此肩書を忘れてはならぬと注意せへ怠らずんば衛戍監窓へ入院する様あことばない斯る監獄へ這入るのは我は軍人といふ肩書あるを忘れたるより起るのである此南條は一人是だけといへば夫迄赤れども佛門に生れたる上は布教すべき身分の肩書を持って居ると思へむ少しも輕々しくはならぬといふことを述べました私が其監獄へ行く度毎に百余人の心を煩ふ病人のあるに驚ろさしが其多數の病人の中にて今の軍曹は三世因果の道理を活用せたる人と云ふねばならぬ如何に活用したるかといへば今の軍人は或る嫌疑を受けて同僚四五名と共に五十日間も未決檻に在りしが其後嫌疑解けて放免の際同僚の云へるには此未決人と既決の罪人と長き間同様の取扱を受けたは實に憤懣に堪へられぬ今日幸ひに青天白日の身とありしゆへ監守押丁を十分に詰責罵詈して去るべしと此時かの軍曹は豫て聞し三世因果の道理を活用して全く悪をなさる因

よて今日青天白日の果を得たり。亦監守押丁に詰責罵詈を加へる。其原因にて一日や半日禁足の結果を受ければあらぬ。今迄の長き既に困難し難せん。之に亦重ねて一日にせよ半日にせよ禁足せらるゝと堪へられぬとゆへ。まづ今日は謹んで歸るに如かずと云ふて同僚を慰さめ。何も云はずに歸りたり。此事まこと心に快きゆへ。今日之を御話し致しあがり御禮に參上とのとであつた。實に一人々々が個様に因果の道理を活用する様もあれば。決して心の病氣を起すことあり。私が明治二十年の一月印度へ行くときセイロンまで十一人程同船を致した。其人達は川上野木の兩氏。他は多くは學生なりし。二月四日の朝コロンポに着した。其前晚即ち三日の夕方舟中にて野木少將の云はるゝには。君は護身刀を所持せらるゝかとの尋ねゆへ。私は目に見へる護身刀は所持致さぬが。目に見へぬ無形の護身刀を所持致して居ると答へたれば。水のしたゝるが如き一刀を取出して。是を持參せられよと

云これた。其時私の護身刀とせるものは三世因果を疑ふ心のなき信あれはと云て出された刃を辭退したとがあつたが實に三世因果の護身刀を携へて居て誤まらば自業自得で仕方がない。誠に此身体はドーあつても一度は死なねばならぬ。否か一度は死かねばならぬと云ふよりは寧ろ一度より外死ぬとはできぬものと考へ見るべし。一度より外死ぬとはあらぬと思へば立派な死に様を致さねばならぬ。再び死に直しをするといふとは叶ぬ。然れば死ぬ程大切なのはあい。夫れゆへ銘々に死に損かはぬ様に豫て心掛けおかねばならぬ。是を以て銘々まづ己れの身分を能く辨へて。我は軍人なり。我は僧侶なり。我は日本帝國の人民なりと其肩書あることを忘れざる様に注意するが第一の肝要なり。是を忘れれば大なる誤りあるものに非るあり。皆サシも能く肩書に氣を付けて因果の道理に順ひ。心の病氣を煩ふ患者とあらざるやう注意ありたきものなり。私はイツも宗教上の話を致す。

其宗教上の話の目に見へぬ心の行く道の方針話しゆへ。他の話ほど面白くはない。けれども面白と思へば實に面白ひ。故に惠燈大師は佛法は心のツマルモノカト思へり信心ニ御ナクサメラレ候と仰せられて。佛法は元來精神を堅めるものゆへ。佛法を聞きて精神を堅めて見れば。事を公けの爲に計りて私の爲よせず。起ては國家の爲に盡し。寝ては國家の爲めに愛へ。以て 天皇陛下の忠臣となられよ。因果の道理を信ずれば心はますます 壯健に赴くべし。病にかゝるが如きとは決してあらざるあり。先づ

○軍人說教 (明治廿四年二月廿一日)

副講 雲 英 晃 耀

今日は軍人方に對して說教をすることになりまゝ。軍人諸君は日本人民中丈は高くして。身体は健康所謂英氣勃々として。サといへば生

命をも抛て。君の爲に戦ふと云ふ精神の人々である。その人々に對して。拙者が說教して御聞せ申すのは孔子に講釋の風情なれども、且く清聽を煩す。夫に付て先づ我國の國体より説き出さねばありませぬ。其國体とわ即ち皇統一系のことである。其の皇統一系の國体わ。皇大神が御孫瓊々杵の尊に對して。瑞穂の國わ是れ我が子孫玉たるべきの地あり。宜く爾ち皇孫ついで治すべし。寶祚の隆當に天壤と共に窮りなりるべし。と勅し給ひたるが根本にして。今日まで一百二十餘代皇統連綿として替らざるは。實に萬國無比と自慢せねばならぬ。然れば日本人民たるものは此の國体維持に付て飽まで同心協力して盡さねばならぬ。拙老は因明學を二十年前より研究し。日本全國に於て因明の雲英か雲英の因明か。と云程に至り舛た。その因明とわ源わ佛説にして。即論理の術である。軍人諸君は有形の武器を以て國体を維持なさる。拙老は無形の因明即ち論理術を以て國体を維持せんとす。然るに西洋より耶蘇教傳來

して無始無終の神が「アダム」「エワ」の一男一女をこゑらへて太神宮も神武帝も彼の「アダム」「エワ」の子孫又乞食非人も彼の「アダム」「エワ」の子孫なれば天子と云へども系圖が尊きに非ず。乞食非人も系圖が卑きに非ずと云ことを教ゆる。大に我國体に差支るゆへ拙老先に因明活眼と云ふ一部の書を編輯し前に陳る太神宮の語を依憑として皇統可王長不可變の宗を立て、十分に國体の維持を主張したつもりである。軍人諸君も此書を一覽あらんことを望む。

さて其の國体維持に付てわ第一に人心を一致團結するを要とす。さしあたり軍人諸君が戦争をするに付ても亦た人心を一致團結するを要とすべし。もし千万人の兵士が千万人の心にて各々別々で敵に打勝つことは出来ぬ。固より今日にては軍律は整ひあれば不足はあらず。とければ人心を一致團結し死を決して戦ひしむること甚だ容易である。其例を擧れば彼の石山本願寺の戦争軍事に慣たるものいたゞ鈴

木重幸一人。餘はみち百姓の鳥合にして別に軍律もなければ鈴木重幸がモノドモ進め捨る命は佛恩報謝と聲をかくれば軍勢がみな命を掛けて戦ふ其戦争の強さと實に驚くべき勢力あり。近くは三河國の針崎の勝曼寺、佐々木の上官寺、野寺の本證寺が家康公と戦争のときも百姓の集合即ち鳥合の兵あれども一致團結決死のたゞかい故に家康公も手に餘されたるなり。これみな宗教の團結力と云いねばならぬ。例へば米の粉は一粒づゝ別々なるに水を加ふれば和して團子となる如く人心の異なるは面の異なるが如くなれども宗教安心の水を加ふれば千人の心も一致團結をすることをうる。其安心とは安は安置安易の義にて心に据をつけること心とは精神即ち無形のものにして目にもみへず耳にもきこへず手にも取られぬ也。華嚴經に心は巧なる畫師の如く能く種々の五蘊を畫くともありて迷も悟もともに心の作用であります。

扱てその心とは朝の鐘はにぎやかよ聞へ暮の鐘は淋く聞ゆる。元來鐘
 の聲に替りあるべき筈はなけれども聞人の心が暮の時は陽より陰に
 向ふゆへ淋く聞ゆる。是に反して朝は陰より陽に向ふときゆへと
 もなく賑かに聞ゆる。又葬禮のとき四方を詠むるに山の色水の聲鳥の
 音までが皆淋しい。是に反して婚禮のときは流るゝ水の音山の聲風の
 聲までが賑かき。これみな見聞する人の心次第である。此心をば西洋で
 は智情意と云ふ。我佛教中俱舍唯識では心王心所と云ふ。その中唯識で
 は心王に入つ心所に五十一を立る。即ち八人の大將が五十一人の臣下
 を持が如しその八とは眼識耳識鼻識舌識身識意識末那識阿頼耶識の
 八にして眼識は眼の心にして色を見る。即ち青黄赤白黒を見分る用き
 あり耳識は聲をきく人の聲風の聲泣く聲笑ふ聲を聞き分る。鼻識は香
 を嗅ぎ舌識は味を分け身識は堅濕等を知るが如く夫々よ用きを備て
 居る。然るに眼と耳とは時間について眼は迅速にして早く耳は之に反

して遅し例へは遠處の烟火を見るに火を先きに見。その火滅せんとす
 る頃にドンと云ふ音を聞く。之を西洋では空氣の波動或わ「エーサー」と
 名くる一種の氣によると云ふ由なり。名古屋の午報即ち「ドン」を名古
 屋にて聞くところの豊橋で聞くとは時間就て少々差があります。又眼
 と耳とは其中間に空がなければその用きは出來ぬ。たとひ富士山の如
 き大なるものも眼球に附着しては見ることが出來ず。又鼓膜へ口を附け
 て話をしても聞くことが出來ぬ。是を離中知と云ふ。又鼻は遠處にて死
 人を焼く香ひ。秋の頃遠處の蓮の香ひをかぐ等。外道の説でわ之を離中
 知と申せども佛教ではやはり合中知と説く。故に佛教中天眼天耳の二
 通あれども天鼻通なき。此の譯である。然らば遠處の香をかぐは如何と
 一云に。香の好悪は鼻で息をせねばにははぬゆへ矢張合中知とぞるなり。
 扱て第六を意識と云ふ。是は物を分別するもの。第七を末那識と云ひ。第
 八を阿頼耶識と云ふ。已上の八と心王あり。此の第六意識に物がほしい

と云ふ貪欲が起る。貪欲が起ても物が已が手に入らぬゆへ瞋恚と云て腹が立つ何程腹を立ても思の儘にならぬゆへ道理の分らぬ愚痴を云ふ心が起る是を毒にたとへて三毒の煩惱と云ふ。煩惱とは煩はわづらふ惱はなやむ。わづらいなやむ心の起らぬときは心が平坦なもの。此の三毒煩惱が増長するとついに神経病になる。然るに安心決定さへすれば心が廣くなる。今ま死しても佛けに成らるゝと心に落付が出来るゆへ届かぬことは届かぬと心が落付て廣くあるゆへ。神経病はをこらぬ。此安心に付て天台宗では一心三觀と教へ華嚴宗では事々无碍法界と説き禪宗では直指人心見性成佛と云ふ。今日は真宗の雲英が説教をするゆへ。真宗の安心を御話しせねばならぬ。扱て我真宗の安心はと云に口に南无阿彌陀佛と稱ふれば彌陀の誓願にたすけられて極樂へまいるありと疑ひなく心に決定して信する計りなり。此南无阿彌陀佛は其數僅かに六字なれども无上甚深の功德あり

りて實に廣大なるもので阿字十方三世佛彌字一切諸菩薩陀字八万諸聖教とも説てある。阿の一字の中には十方三世の諸佛がこもり彌の一字の中には一切の諸菩薩がこもり陀の一字の中には八万諸聖教の一切經がこもりと云ふ程の功德があるゆへ小兒でも老人でも稱ふれば助かると信すれば佛の誓願によりて佛けに成れるに間違ひなし。夫はかせと云へば本と彌陀如來が五劫と云ふ長の間だ思惟し衆生佛にならずは我も正覺取らじと云ふ誓願を立て兆載永劫の間だ修行勤苦の功によりて出來わがりた名號ゆへ之を信すれば佛けに成らるゝは間違ひなし。然ば我々が佛にあるについては成れる成らぬの不定心の疑が惡ひ彌陀の願力不思議で佛に成れるに違ひない。心に決定して信するたつた一つこれを安心決定と云ふ諸君も知らるゝ如く大將も死ぬ兵卒も死ぬ力ら山を抜き氣世を蓋ふと云ふ英雄でも識古今を貫き學東西を兼るとまで譽めらるゝやうな豪傑でも死ぬこと一つはのが

れられぬ英雄自古皆販士命のある中に安心決定さへそれば心は大
 海の如く事に臨んで驚かぬ軍人諸君は別してスワといへば命を差出し
 て戰場に臨まるゆへ戰場に臨んでから俄かに安心決定しよふとせら
 れては諺に盗人を見て縄と云ふ風情にて間に合はぬ大平無事の平生
 に安心決定せられねばならぬ佛に成るに付ては自身の力らではゆか
 ぬ南无阿彌陀佛にて未來佛に成るに違ひない此坐限り決定して
 信せらるへし此の南无阿彌陀佛は實に稱へ易ひ名號であるよつて大
 閻秀吉公の歌に「この六字軍中にても稱ふべし本願坊のをしへなりけ
 り此の稱へるに付て稱へ心が大事我眞宗では稱ふれば助かると決定
 する一念に未來佛に成るとに定るゆへに報謝の思ひより稱へる念
 佛ありと教ゆる諸君此處に安心決定し其上は一百二十餘代連綿たる
 皇統一系掛け巻も畏こき萬國無比の御國体を維持し天地と與に無窮
 に傳へねばならぬ然ればその國体維持の一致團結心に就ては宗教安

心の決定が第一であるなり。

○軍人說教 (明治廿四年九月十九日)

擬講 吉 谷 覺 壽

本日は兵士諸君のためになぞ、西京より出張をいたしました。去る
 六月の定期會の時にも出張をなして演説を致した事である。元來この演説
 と云わ宗教の御話をするのでその宗教には種々あれども今は釋迦牟
 尼佛の説き給ひたる佛教を御話に及びます。
 扱て學問と宗教と混雜してはならぬ學問は萬物の筋目を分て道理を
 研究するもの。宗教は道理々屈を離れ己より徳望高き人の云て置きた
 ることを信じて身口意の三つをつゝ、えみ日々の利益をするが宗教と
 云ものその宗教は佛教のみに非ぞ。世界萬國にてをもなるもの凡そ十
 大教と分れてをる。その中今この佛教の功能實益と云ものはどの位で

あると云に此の佛教に余程の實益がないなれば大切なる時間を費してこれを知くには及ばず別して軍人諸士がうく參聽さるゝは實に此宗教に實益がなくてはならぬ。然るに藥劑には實益ありと云て藥屋の店や醫者の藥筆司に在てはその効能は顯之れぬ。病人の服するを待て始めて妙藥の妙藥たるどころが知れる如く此佛教も人心教化の實益を顯すに付ては先此教理を擴く世人に聞かすが第一であるその聞すに付て時勢を鑒み佛教演說と云ことを始めて東京に於て開たことである。即ち明治十四年六月三十日京橋區木挽町厚生館に於て真宗大谷派の僧侶即ち私共が發起して開會いたしたが佛教演說と云ことこの嚆矢にして爾來寒村僻地に至るまで布教の法方に彼處でも此處でもこの演說の開けるは實に賀すべきことである。然るに一利一害は數の免がれざる處でこの演說が青年輩の玩弄物の如くなりつゝには面白さに聞きにゆく一段聞き様が悪いと成る程と云に止てその眞理をさうす終

に演說者の巧拙を論じ辨舌の上手下手を聞てかへる様なことでは千萬遺憾である。この佛教の眞理を聞かんと欲せば暑中の炎天に砂糖水を飲むが如く心得て聞けば良藥口に苦しの風情なれども能く聞て置けば必ずその實益が顯るゝ成る程と聞た斗では所詮はない朝起きすれば金持にある。夫は成程なれど成程丈では金満家にはあられぬ。成程が誠となら夫を身に實行せねばならぬ。是に付て信解行證と云ふことあり信とは眞理疑ひなしと信する。その信せるも無茶朽茶に信じては益はない胸中に筋目を了解する夫を解と云ひ信解あれば必ずその通り身に付てゆくを行と云ひ。その行てゆけば果して好結果の得らるゝを證と云ふ。然らば成程と聞くは第一の信の一分片端ゆへに次第に進で夫が眞理を聞きねばならぬ。その眞理を聞くに付て佛教は次生心魂の歸着を説く斗でつゞまる處未來談と思ふと大間違ひである。家を新築するに付ては石垣をし土臺を堅めてかゝらねばならぬ。大体佛にお

と云ふ成佛の家を建るには此世の地堅めよりせぬばからぬ佛といひ
 りなるものであると云に形体上五官のそかへ方は我々と同一なれど
 もその胸中に我々とは迷悟の差異ありて我々の妄想分別でにくい。う
 わよいほしいねたましいの胸中であるのに佛は慈悲と智慧との二を
 持て在る智慧とは利害得失を分別するの作用に名け慈悲とは己を外
 に他人にわれれみをかけるなさけのこと此二を圓滿して在るを佛と
 なづく。

扱て此慈悲と智慧との圓滿を悟るに付て人間の中に先その下稽古を
 致さねばならぬ。その下稽古とい即ち智識と道德とにして智識の眼の
 如く道德は足の如く智慧の眼を以て利害得失を分別し道德の足を以
 て運動を致してゆく。然るに世界が進化するについて智識は進歩する
 ことおれども道德が退歩する。この道德と云もの人間の生れ付き持
 て出たまことにして即ち良智良能と云もの夫が發揚せざることなれ

ば所謂實の持柄りて現在我日本帝國の人民が近來多は邪智狡猾にあ
 りて利己主義を本とする分野になり物の道理を考へ國家のことを思
 ふもの減少したるは即ち此道德の衰頽したるのてあるゆへ實に之
 をかなしまざるはあく是を思はざるものはない。夫故我 天皇陛下に
 お昨年十月三十日教育の勅語を下し給ひ「智能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ
 と仰せられて智識と道德とをならべて詔し給ひたるもの徳器とわ道
 徳のうつわもので我々が履行すべき道である。その道德とは何なるも
 のかと云に即ち忠孝仁義あり。然るに近來西洋より義務が勝て權利の
 薄ひ珍布き教が傳來せしより昨今までは此道德の標準が判然せざり
 しに右の勅語にてその標準が定れた實に日本臣民たるものは陛下の思
 召に異論はない。忠孝仁義が即日本人民の守るべき道德の大本である
 忠孝とは勅語の始に克く忠ニ克く孝ニとあり仁義とは五常のこと君
 に忠に親に孝をするよ付て仁義禮智信の五常と云ことあり常はツチ

で古も今もかわらぬもの道は萬代不變に名く然ば我々が守らねばあ
 らぬは忠孝仁義の道德であるあり。
 先仁とは仁愛と熟してあはれむこと天地人の三才日月四季では此仁
 を天の徳に配す。天はひろくして涯りなくあらゆる萬物を生育してゆ
 くが天なり。夫ゆへ勅語には仁の道を博愛衆ニ及ホシとある佛教では
 是を慈悲と名く。歌に「アハレミチモノニホドコス必ヨリ外ニ佛ノスガ
 マヤハアル」と何程智慧ありても仁心なきときは國家を治ること能は
 ざるは古今の歴史上に明なことで彼の佛蘭西の那波崙は二度まで帝
 位に登り萬國に名を轟りせし智者なれどもその志すところ名譽の二
 字に在て道德心も乏きゆへに終に人慾の己に克つこと能はずして三
 度目よりセントヘレナ島に流されました。又英吉利の威林頓は國の大
 將の任に在て其人となり萬人を手足の如く愛し私欲を去りその志す
 所は職分の二字に在て善く其本分を盡さんと欲するの志し篤きによ

り何なる艱難に遇とも屈することなく耐忍し耐忍をし智徳兼備の人
 ゆへ終身大將の任を全したことである。此二人の事實に付ても智慧あ
 りとも仁愛の心なきときは國を持ち家を持つことの出来ぬと云ことは
 尤も見易ひことであるあり
 扱第二に義とは筋目をたゞしくすることでは是を地の徳に配す。大地は
 山川草木國土の高低まで筋目の判然してをるもの。勅語には義勇公
 ニ奉シとある是あり例之甲に奪て乙に與ふるが如き與ふる所は仁に
 似たれども奪たる所が義にかけてある。此仁義の二ツは是非はあれて
 はあらずぬもの。

第三禮とは體也とも注して仁義を行ひ顯す土臺にあるもので是を人
 に配す。此禮を欠くと傲慢不遜にありて道を踐みあやまる。勅語には恭
 儉己レヲ持シとあるが此の禮のこと。

第四に智とは利害得失を分別する。之を日月の光に配當す。日はよく晝

を照し月はよく夜を照し以て山川草木黑白等を識別せしむるが如く物を分別する作用を智と云ふ。勅語には「智能ヲ啓發シ」とある。人と禽獸とは心魂は同一かれども此の智の有無に依て差別が分るなり。第五に信とは即ちまことで朋友の交際上には一番入様のものにて勅語には「朋友相信シ」とある。このまことと云に付ても種々の文字あれども此まこととは人篇に言を書いた文字人の云いたる通り約束の違わぬこと。約束が違ふゆへ人に信用を欠くことになる。是を四季に配當す春夏秋冬は實に約束の違わぬもので春去れば夏來り夏去れば秋と云が如く屹度たがわぬ。春の次には秋夏の次には冬來るりと疑ひ。又春來て櫻の花桃の花のさくまいと疑ふものはない。四季の往來約束の違わぬ萬代不變誰一人も疑を置くものとかい五常の義大略如是である。私を始め氣の付らざる所は仕方ないかかれども忠孝を守るに付ては此の五常の道により君に向へば忠親に向へば孝。寝ても覺ても五常の道

に外れぬ様いたさねばならぬ。草木には心がない。禽獸に心がある。心ありと云へども智慧がない。然るに喜ぶべきは我々人民。人は萬物の靈にて精神ありて併も良智良能を具へてをる。何卒人慾の私に覆はれぬ得手勝手の發動せざることも十分注意し。政治は形体上を支配し宗教は内部の精神を支配するものゆへ平常は身口意の三をつししみ忠孝仁義の道を守り一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシとの勅語を厚く奉載し日本臣民たることを忘れず別して軍人諸士は一朝國の大事となれば國家の干城とならるゝが何よりと存じ升。

○ 演 說 (明治廿四年九月二十日)

擬 講 吉 谷 覺 壽

布教の法に付て説教演說の二種あり。演說とは大海の一味あるが如く。

物體佛教上の話をあし。説教とは川々の水の異なる如く其宗々にて別
 なるものゆへ。心の落付き安心立命の邊の縁の有無に依て別なるもの
 去ればとて宗旨上に善ひ惡ひの相違あるに非ず。或わ天台の一心三觀
 が難有とか或の眞宗の念佛が尊ひとか。一は宗教上に於て心魂の歸着
 を定むるも付ては。その宗よりて信仰を別とする譯である。
 今は一場の演説を開くとなれば。今日の學問と宗教とは如何なるもの
 か同かりや將た異ありやと云とを述ぶるつもり先その關係を話すに
 付ては其性質よりしらべねばならぬ。學問の性質は物の道理筋道を究
 ひるもの故に理屈をあらべてその理屈が立てばよいので。宗教の方は
 夫とは大違にて。道理々屈を離れ心魂の歸着を定むるが所詮にてある
 彼のレンジングが我ハ眞理ヲ知り盡サンヨリモ寧ロ是チ永久ニ遂求セ
 ノコトヲ欲スと云し如く學問と云ものは心の落付き時はあひ學べば
 學ぶに順て進化してゆくものあり。夫ゆへ萬物の眞理を考へて。羽毛は

輕きものにて緩に降り。金石の如きは重くして急に落下するものと凡
 そ千年間も是が眞理と思ふて居たるに後ちガリレオと云ものが實檢
 學を研究し金石は重く羽毛は輕きと云は誤りにして重力の作用は物
 質に強弱あるに非ず。墮落は緩急遲速のあるに全く大氣の抵抗による
 ものと云より。排氣器と稱する一器を發明し試験を行ひしに果して大
 小輕重にかゝはらずその落下するに遲速なきことを知り物質に依て輕
 重の異ありと思ふは眞理に非ざることを始て研究したるとなり。是に由
 て見るに學問はいよく是でよひと云とはあひ學べば學ぶ程意中に
 心配を起す宗教は不然自身の分別小刀細工のやめて。釋迦牟尼佛の説
 き置き玉ひたることを仰信するなり。今日凡眼より見れい水瓶より火の
 出たる様かともあらふかかれど。此佛説の釋迦佛か證を開て諸法の眞
 理を説き玉ひたるとなれば自分の計ひを加へぬを宗教と云ものなり。
 然るに世間の人が是を取違へ。佛教は學問に相違はなひ已に去る明治

十四年九月より帝國大學の教課にまで加はりてをる耶蘇教こそは宗教にして、佛教之學問なりと誤てをるもの數多くあるとされど佛教は通途の宗教とい違て萬物の眞理に契てをる宗教ゆへに見眞大師の言に親鸞ニナキテハタ、念佛シテ彌陀ニタスケラレマイラスヘシトヨキヒトノオホセチカウフリテ信ズルホカニ別ノ子細ナキナリ。念佛ハマコトニ淨土ニムマル、タネニテヤハンベルランマタ地獄ニオツヘキ業ニテヤハンヘルラン惣シテモテ存知セザルナリ」と師の教に任せるが宗教の本分なり。本願名號正定業と云ひながら直ぐに念佛は地獄の業が淨土參の因ねか知らんと云はれしは深意のあることにして。見眞大師は九歳の春出家し。廿年間比叡山に在て天台を學び併せて諸宗の學を究め其後ち下總の藥師寺に於て一切經を讀誦し佛教の眞理源底を極めたる上に何故に箇様などを玉ひしやと云に行ける行けぬの自力の小心では安心が出来ぬ己が心を捨て、たゞ念佛して彌陀に

助けらるゝに相違なしと學だ學問もすて研た智恵もすて、往生之業念佛爲本の師教に任せ。自分の心を加へぬ相がた。是が實に宗教の宗教たる處である然バ眞宗は道理に外れてをるかど云に正信偈には惑染凡夫信心發。證知生死即涅槃と云ひ和讃に無明法性コトナレト心ハスナハチヒトツナリ。コノ心スナハチ涅槃ナリコノ心スナハチ如來ナリと是が佛法の至極うづだかい處で。煩惱即菩提生死即涅槃の意にして。清水も濁水も水の体に異はあい如く暑ひ寒ひ可愛は濁の心ありこの心が即ち證の心あり。犬や猫の心も心に相違ひあり。畜生は食物が欲ひくで日を送るのみの異で即ち濁水あり佛の心は夫が清きまでのと爰が華嚴天台にも一步をゆづらぬ道理を具ておる處あり。故に此學問は心の落付く元手を拵らへるまでのもので。丁度階梯の如きもの。登り終れば不用であるのに階梯斗りを上下して居ては安心の二階へ登り上る時節とあい心の落付く二階へ登るに付て眞宗では八十通の

御文に依て安心する天台では摩訶止觀廿卷を讀み明して安心するその止觀の中に安心するに付ては四事を廢せねばならぬと云とありて第一が生活先家業渡世の職業をやめ第二に人事人間互の交際に目出度き見舞も死亡の葬式も廢し第三に藝能生花茶の湯畫工等の遊藝をやめ第四には學問學處覺へた處の學問がわれば我慢我情に成て心がさわがしくなるゆへ學問之廢せねばならぬその學問を止た相たを失意のものゝ如くせよと教へて失意とは中氣健忘病の如く分別考へをやめて正根を失ふたことその上に心が定るとある宗教信仰の一段に付ては如是こと況や眞宗は我れが箇様に聞た我は斯く聽聞したと云ひながら自義を骨張してはならぬとあり慥を佛陀が在て我等が心の世話をやひて下さるとゆへ分別を離れて信せねばならぬ然ば學問と宗教との區別あれども亦た離れたものに非ず佛教は宗教にして學問には非るとかくの如くなれども學問の道理に契ふ様に組

立てゝあるその受け心は智慧も入らば才覺も入らず心易く信せらるゝなれどもその佛教は理學哲學にわたはめても決してひけを取らぬ教理ゆへ自義を加へてはあらぬ學問と理屈をならべ宗教は實際實地に應用してその用きを顯すものゆへ何程理論は高尚でも行ひにかけ實益にかけて功能のなひ已上は益にはならぬ彼の周梨槃憤と云人の至て愚頓にして庭の掃除に掃くを命すれば帚を取ると忘れ帚を持てば掃くを忘ると云程の人あれども一心一向に釋迦佛を信じつひに阿彌陀經の初には大阿羅漢の中に列てある此人は収口説意身莫犯如是行者得度世の二句の偈文の意を悟り口に云ひたひとも云はずして意中にをさめ口を守り身を慎みたれば夫がために心の悟が開たるとそこで元祖の言にも心口ノ二業ヲ意業ニユツリと誠め玉ひたるも此意あり實に安心の功能は未來のみに非ず未來精神の歸着の出來た上は此世の行ひは無論のとゆへ意中に思ふ斗は致方もなひゆへ

身と口とは精々慎み。安心立命の上。此世の利益を計らるゝか何よりの事なり」

○演 説 (明治廿四年十一月十六日)

壹等學師 小栗 栖 香 頂

今日は初めて當地にて演説を致す。私は明治六年より支那國に出張して長々と北京に滞在し。明治八年に中飯りをし。明治九年に大法主殿眞無量院様。即ち今の大門様の仰を蒙て東京へまいり。寺嶋外務卿へ御相談を申し上げた。私共の檀那が私へ申付けて支那國へ眞宗の教義を擴く布教せよとのことゆへ再び出張を致す處存何卒御保護を願ひ上ますと申したれば。夫は感心海外布教と之本願寺も大奮發ちやと。事の外の大賛成。夫れより亦京都に立戻り大門様に私の支那國て一生を終るの決心ゆへ御染第の墓印を願ひますと申上たれば。夫は死んで後のこと、

演

說

て一首の和歌を頂戴いたした。夫より上海別院を開設。八月廿日に説教を致したれば三千人程の參詣。

然るに明治十年に「中風」の重症にかゝり左の足が叶はず左の臂を右の手にて助け上げる位。隨て舌の根がこはばる様になり言語を發する事が叶はぬ。此中風はいやあ病で生死の程が計られぬ。半身不隨の身となり御本山には御雜用をかけ奉る斗り。夫より西南戦争のたゞ中に歸國して豊後の温泉へ七年間。或は三十日或は二十一日或は十四日七日と毎月々々の入湯。夫れゆへ左の足も徐々に歩行の出来る程にあり。舌の根も右の方で左を助けて漸く言語も發する様になりたが。役に立たぬ体だ未だ御用の間には合はぬ。夫ゆへ明治十八年より東京在勤東京は御用向もゆるやか。拙老も當年六十一歳中風にかゝりてより春と冬と加年に一度や二度は必ず起ることなれども。今日まで存命いたしてをるは實に喜ばしい。然るに無益の身体ても一片の精心がある外ではな

い朝廷のためになりた。佛法のためになりた。四千萬の人民のためになりた。い云ふ此外はあ。身体の叶ふあいだ口の叶ふあいだ毎日々々講釋說教。已に新聞雜誌で承知である。貴婦人會より監獄の說教軍人の說教外のことではない。何卒朝廷と佛法と人民のためになりた。ひの精神。淨土眞宗には御開山の御言御消息の中には「朝家ノ御タメ國民ノタメニ念佛ヲマフシアハセタマヒサフヲハメテマフサフヲフヘシ」と御流れ汲みものは忘れてはあらぬ。此御思召を知るには眞宗開闢の時節を知らねばならぬ。開宗は關東常陸の國稻田に於て五十二歳の御時。歴史を讀むものは承知のこと。源平已來は國体か地に落ち源平の合戦か終て幕府が出来。北條か政權を握り云は、天下のねうしおこしをする。天皇陛下は京都に御隠居同様の時ゆへ。北條家へ開宗を依頼せねばならぬ。なれども御開山は將軍のためと仰せられたことはない。關東にありながら朝廷のためと仰せられたとゆへ。時の人が阿房

の如く云たに違ひない。朝家のため國民のため念佛申せば目出度ひと仰せらる。又蓮師は王法を本とせよ。幕府のためであり將軍のためであり。天に二日さく地に二王さし何でも王法は本とせねばならぬ。是が御國体ぢや。皇太神か瓊々杵の尊に勅し給ひし御言が根本で憲法第一條に「大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す」帝國とは保護國でない。付屬國でない。天皇陛下の國ぢや。北は北海道のはてより南は沖繩琉球に至るまで日本全國。一穗の稲一本の葉までが。天皇陛下のものでありものはない。其上日本天皇は萬世一系。只帝國と云へば支那魯西亞英吉利獨逸。以太利と幾國もあれども皇統一系は外にはない。近く支那で云へば。現今は清。其前は明。明の前は元と。外國人まで入込で強ひもの勝ちに天下をとる。何れの國も同じと。一系と云へば。只我日本帝國のみ。天神七代地神五代神武天皇より今上天皇に至るまで。外國より養子を貰たとはない。奥様を貰たとはない。御開山の時分は天皇陛下の國か幕府

將軍の國となり御國体が分らぬありた。其時御開山の朝家の御ためと仰せられた御精神は實に天地に充ち満ちてある。後醍醐帝のとき楠正成藤原藤房新田義貞が王政復古に力らを盡せしも三十年を出でずして亦元との通り誠に遺憾のことでありた。夫に付て學問をするにも今日西洋と交際するにも善惡を選ばねば弊害がある。昨年名古屋にて軍人に對しても話したとがある。私は兵法は知らんかれ共己前七書を讀だとがある。其六韜の下に甚だ國体を害する言がある。天下は一人の天下に非ず乃ち天下の天下あり天下を取るものは野獸を逐ふがごとし天下みな分肉の心ありと野獸を逐とはし、がりのと肉は誰れ皮は誰れ足は肝はと分け取りにすること。實に言語同斷の言。私は六十二歳の老境參詣の中に私程の年輩は澤山はない。様だ。年寄衆は承知のとちやか已前は御領地の御百姓。私は尾張様の百姓。私は彦根。私は薩摩。私は加賀。大名の臣下ちや人民ちやのと云て居て

天皇陛下の地面と云とを知らん程のと大名の土地將軍の地面と云ふ妄想を破るため朝家の御ためと仰せられた御言御開山の御精神。この小栗栖の精神。天下の濱王土王臣に非るはなし。斯く御國体を來聽諸君の心よツット入れたいと思ふて長々と話したと。今より後は國体を誤る人はないか。今日より已後は外國を用心せねばならぬ。已前は鎖港。今は開港。外國交際をなさる世の中注意に注意を致さねばならぬ。先に六韜の國体を害するを話したが又た善ひ處は取らねばならぬ。即ち天下の目を以て視るときは即ち見へずと云こと。あし天下の耳を以て聽くときも即ち聞かずと云こと。なし天下の心を以て慮るときも即ち知らずと云こと。なしとこれの定善義に見聞知と云こと。か出てあるが符節を合する如くである。魯西亞は云何である。英吉利は云何である。佛蘭西。獨逸。伊太利亞。米利加。合衆國はと見聞知せねばならぬ。隣へ盜人の入たるを知らんではならぬ。隣家の火事をかまはずに居られん。

天下四千萬の目を以て見耳を以て聞き心を以て知らねばならぬ。夫ゆへ昨年より國會開設。上院之貴族方よて平民も加はりて居る。下院は日本人民の代議士惣名代是が天下の目耳心なり。當今は文明開化の世のなり。文明開化とは優勝劣敗の替名。今に外國人雜居になれば、礦山の金も鐵道も日本の寶はみな買上らるゝ。最も恐ろしい恐ろしい戦争には三種ありて。一は炮戦す。あはち西郷戦争の如きもの。二は商戰資本家と資本家と競争のいくさ。三は教戰是が一番恐ろしい外國よりの親切らしき教化を受け。錢を貰ふたり救助を受けたり其わけくには國に熨斗を付て外國へやる様にある。夫ゆへ私も大臣方へも申上ることなれど日本宗數の神佛二教で何の不足かある。つまり喰ひす嫌ひてはならぬ。日本の宗教唯識であれ天台であれ華嚴であれ眞言であれその味ひを御承知か。歐洲崇拜は國體維持に害かある。近く亞細亞と云何である多く歐洲に取られて居る。その中天竺は釋迦出世の國あれば最負を致ま

たいか至て頑固人故内乱外寇の已むとなく。遂に英佛人に救を求め英佛人もその機に乗じて兵力を假し土地を奪ひ終には國の七八分は英國の支配にありし今日のありさま。又支那は幾何である。中に女を書きて兩方に男を書けば、彌と云ふ字にあり二人の男が一女をなぶる如く。右に英吉利左に魯西亞已に香港の慰斗付きとなりたり。故に我々日本人は天地のあらん限り日月のあらん限り草未國土のあらん限りは國體維持には注意せねばならず用心せねばならぬ。爰に一の相談があるが聞て呉れまいか。聞て呉る人は右の手をツツト突き上て貰ひたい。滿堂の聽衆過半數右手を舉ぐ。講師曰有りがたい能く聞て呉れたその相談とは外でない。前に朝廷のためと云とを話たに付て。天皇陛下。皇后陛下。皇太子殿下の萬歳を唱るゆへ同音に唱へて貰ひたいのか。拙老のたのみ。講師音聲を改めて曰。天皇陛下萬歳。聽衆一同異口同音に曰。天皇陛下萬歳。講師曰。皇后宮陛下萬歳。聽衆曰。皇后宮陛下萬歳。講師

白「皇太子殿下萬歲」聽衆曰「皇太子殿下萬歲」此に於て講師は演壇を下らんとす聽衆中の一人大聲に曰「小栗栖香頂師萬歲」講師演壇を下りながら最も大聲にて「有難

○說 教 (明治廿四年十一月十六日)

壹等學師 小栗 栖 香 頂

眞實信心ノ稱名ハ彌陀回向ノ法ナレハ不回向トナツケテ自力ノ稱念キラハル、トイフハ彌陀ノ方ヨリヌム心モタフトヤアリガタヤト念佛マフスコ、ロモミナアタヘ玉フユヘニトカセンカクカセントハカラフテ念佛申スハ自力ナレバキラフナリト仰候ナリ」
豊橋は毎々通行はするなれど別院で御話するは今日が始て拙者は當年六十二歳中風の重症にりりてより十五年左半分は叶の半身不隨の身体になり七ヶ年間の入湯で快くなるは成たもの、毎年々々一

度や二度は發病するが先當年も今日までは發らぬ併しながら此病が縁と成て難有とには御慈悲が喜ばれる無量永劫今日まで迷ひに迷ふ此拙老が今度は御淨土に參る死にたきとはなければも死して淨土參の心持は光明に包まれた様さ心地百回も千回も取りかこまれ大願業力増上縁の力で此度は淨土に參らして貴ふ今までは是れではあれではと氣使ふたが今はその心はない攝取の光明大願業力の御はたらき己が心が悪かると好かるふと死して淨土に參るとのありがたさと喜ぶ身に成た。

夫に付て去る十月一日より十三日まで名古屋別院の對面所にて日々拙老が胸中をふち出して話たるとおれども拙老は幼年の時分は遊び好きにて學問嫌ひ七歳八歳までは頭を叩かれたり柱に纏り付られたりせられても學問をする心が無かりた然るに十一歳の時より學問が好きにあり十三歳の頃には左傳ぐらひはわかる様にありた淡窓先生

四十
 に隨て詩作々文段々學問が面白く成たら佛法が嫌ひになり念佛を稱
 へたり佛を拜むとがいやに成た。すると親父が香頂よ佛を拜で呉れよ
 念佛稱へて呉よ。此貧乏の中より學問をさせるは佛を大切にし念佛稱
 へて淨土に參したいの斗り。夫に佛を鹿末にゐるとは實に言語同斷のと
 ちやど。異見に異見を受けても儒學が面白て爺々サン婆々サンの様に
 念佛は面白くない。後廿才をこへ學寮に入りて佛學をそるに俱舍唯識
 因明大疏義林章段々學ぶに隨て華嚴天台眞言禪宗も知らねばならぬ
 知るに隨て我眞宗は念佛ナニ我等が如き學者が念佛位ひわドースル
 かど云ふ程の氣分。三十八才の時學頭職に成たゆへ餘程自慢の心持で
 歸國をするとイヤ大間違ひ親父が兩眼より涙をこぼし香頂よ貧乏の
 中より京都に留學させるは何のためか念佛を稱へ佛様を大切にし佛
 恩を報する身よ成したいの斗りたどひ擬講になりたるも學問では淨土
 へは參ひれんぞと嚴ひ教訓をいたしてをいて終に四十才の時親父は

淨土へ往生を遂げられた。その父の教誨が肝にしみ込み。夫より師匠の
 香山院に私は今日まで學問は致しても眞實の信心が胸にあひと腹底
 を隠させ明したれば香山院も多ひに喜で擬講に成ても信心があいか。
 信心が得たくば聞其名號信心歡喜ちやで。説人は選ばず説く處の法は
 彌陀の本願無學文盲の坊住の説教でも但しハ書付法談でも法に違ひ
 ないで説教を聞くが所詮これより外に信心を得る道はないと教へて
 貰たゆへ夫より段々聞きしする中に何時の間にかやら舟に乗た心持
 ち大願業力増上縁死て淨土參りの身分と今日は安心させて貰た。
 扱て只今讚題に述べた御言眞實信心ノ稱名ハ彌陀回向ノ法ナレハ不
 向トナツケテツ自力ノ稱念キラハル、と一首の和讃を引て夫をやわ
 らげて彌陀の方よりたのむ心もたうとやありがたやと念佛申す心も
 みなわたへ給ふゆへに。兎やせん角やせんとはからふて念佛申すは自力
 なればさらふなりと仰候ありと彌陀の方よりたのむ心も下さる尊や

有がたやと念佛申す心も下さるゝとの御釋。そのたのむ心も念佛申す心も下さるとい何處から下さると云に第十八願は僅か廿八字なれども三信がたのむ十念が念佛申と。拙老も病身のとゆへ當別院で話をそるも今日が始めの暇乞ゆへ篤と話が致したい。信心とて六字の外にはあるべからず。白銀の簪は白銀黄金の指輪は黄金。黄銅の耳搔は黄銅と。物柄名前はいはれどもその体はと云へばみか金より外はありたのむ心も尊や難有やの心も南无阿彌陀佛の六字が体。その体となる南无阿彌陀佛が南无はたのむ阿彌陀佛は御助け南无と阿彌陀佛のとを名古屋で十三日の間話した。中には不審を立て、聞きに來たものもありた。今日も此機法一体の話をして彌陀のたのまれん人にたのませて御目にあげようと思ふ御開山はよりかゝるなりよりたのむありと仰せられ。拙老の如き半身叶ぬものでも左の方を柱にもたれたら仆るゝ氣使えない。赤子も母人によりかゝるなりよりすがるなり。大海を渡る

とは出來ぬのに船の真中に座り込めば安々渡らるゝは船によりかゝるなりよりたのむなり。陸地を走るには蒸氣の車によりかゝるなり。りたのむなり。三世の諸佛には忌み嫌はれ九方の淨土には門戸を閉ぢられた我々は船に身を任せ瀛車に体を任た如く本願によりかゝるなりよりたのむなり。約束の南无阿彌陀佛を稱ふへしやろうやらすは彌陀のはからい。船や瀛車の話では他處のとゆへまだ分るまい。まだ任するところが出來まい。出來ねば法の方を詠めねばあらぬたとへば斯く此堂に集て居らるゝは皆人疊の上に坐てをる足に感覺さへあれば坐てをる下は疊と云とは云までもかゝい疊が目につけば己が坐り場ゆへ己れ忘れて安心してすわらるゝは疊の上によりすがるなりよりたのむなり。繩渡のつかの上に坐はるのではない。阿彌陀佛と云はをさめたすけ救ふと讀める。繩渡りてはない。南无阿彌陀佛の疊が見へたら難有や尊やと己れ忘れてすわらるゝ。こゝが機法一体。一体とは頭と身体と離れ

てをらぬと頭は先きに産れ三日五日をへて後に身体が産れたら一体でない。頭と身体とは一時に産れて離れてをらぬのが一体それゆへ頭の方の耳の先を引ても身体は付て来又身体の方の小指の先を引張ても頭が付てくるこゝが一体。南无は頭阿彌陀佛は身軀。南无と阿彌陀佛と離れてない。南无の二字はたのむそのたのむもたのむではさう下に阿彌陀佛の御助が付てある御助に間違ないとの難有やとすわりこまれたが御當流の御安心。

扱てこの外に話したいことが東京土産から支那の話から澤山にあるが。其中今日東京の佛法繁昌の野分は昔はキタナクイマハシキ宗ト人オモヘリなまぐさ坊主などゝそしられしに去る明治十九年六月廿八日善知識が御巡化に成て跡を拙老が引受け夫より正一位大政大臣の興様を會長にし貴婦人會を組織し今日では已前の様な爺々宗婆々宗ではない旭日の天に昇る如きの御繁昌同行達よ代々御流を汲み乍ら信

心か頂のれぬと云ては誠に寶の山に入て手を空くしてかへるも同然此度の本願の丈夫さによりかゝるなりよりたのびなり御助けに間違ないことを安心して日送りが何によりのと。尙去る十月廿八日の濃尾震災被害者へ同胞兄弟は應分の義捐をなまへしとの講説ありたり

大 家 說 教 演 說 終

法藏館出版廣告

知恩院門主 日野靈瑞師題辭 美野田覺念居士演說并ニ序
眞宗本派司教 赤松蓮城師題辭 田島 教 惠 君 編輯
同 勸學 小山憲榮師題辭

能辨大家 駁邪演說筆記

定價金拾五錢
郵税金貳錢

製本榮奇美麗
仕立方堅牢

右は雄辨卓越駁邪を以て天下に雷名を聳かす美野田覺念居士が明治廿四年十月十七日近府縣聯合の基督教大演説を京都四條劇場に於て開會せる際居士は一撃の下に其妄説を打ち破り遂には一大騒動を引き起したるの顛末を述べ且つ基督教演説の妄説を顯はさんが爲めに同劇場に於て居士が駁邪佛教大演説會を開會せられ二千余人の聴衆は非常なる感動を受けたり時に田島教惠君は例の達練なる速記法に由りて右の演説を傍聴筆記せられたれば本館主人同君に乞ふて之を世に公にせられん事を勸む同君は愛國護法の爲め喜んで之れを普通平易の文体に編輯せられ已に本館より發行したり夫れ覺念居士の雄辨壯快なること天下に知らざる者なし宜なる哉東京斯聲館より懸賞法を以て諸大家を投票せしに**覺念居士は雄辨大家に當**撰せり然りと雖も未だ居士の演説筆記を世に公にしたることなし之を印行に附せしは本館其嗚矢たり希くは破邪顯正に熱心なる諸君は一本を購讀あれ

大家佛教演説集

●全一冊●正價金貳拾錢●
郵税金四錢●製本美麗堅牢

右ハ曩ニ雄辨大家覺念居士駁邪演説筆記ヲ編輯セラレタル田嶋教惠君ガ先ニ數年間東京ニ留學シ休日或ヒハ通學勉強ノ餘暇アル時ハ演説傍聴ニ行カレ宗教ニマレ學術ニマレ悉ク之ヲ筆記シ遂ニハ七十餘席ノ多キニ及ビ二冊ノ大帙ニ達セリ時ニ昨秋同君ガ京都ニ來ラレ一日佛教大家某君ニ面シ談偶々右ノ演説筆記ニ及ブ某君乞フテ之ヲ一覽シテ後チ曰ク此演説集タルヤ精確ニシテ有益ナル事普通ノ演説筆記ノ類ニ非ラズ宜シク之ヲ世ニ公ニシテ以テ愛國護法ノ一助トナス可シト田嶋教惠君大ニ感ズル所アリ即チ「帝國大學教授」村上專精師「文學士」棚橋一郎氏美野田覺念居士「文學博士」南條文雄師赤松蓮城師田中智學氏佐治實然氏吉谷覺壽師大内青巒居士「文學士」辰巳小次郎氏高田道子前波善孝氏等帝國大家高僧二十餘席ノ佛教演説ヲ顯ハシ名ケテ大家佛教演説集ト題ス本館主人同君ニ乞ヒ既ニ之ヲ出版セリ此ノ如ク田嶋教惠君ガ護國扶宗ノ爲メニ達練ナル速記法ニ由ルテ近世佛教大家ノ有益ナル演説ヲ俗語其儘ニテ筆記セラレ殊ニ演説中不審ノ箇所アル時ハ演説後一々辨士ニ向ツテ質問サレタル程アレバ一ノ誤謬ナキハ勿論一讀スレバ眞ニ佛教大家ノ演説會場ニテ直接ニ傍聴スルノ感アラシム宜ナル哉子爵久松定弘君ハ懸河之辨如風無礙圓鏡之智如日除闇トノ辭ヲ與ヘラレタリ希クハ江湖ノ諸君ハ僧俗ヲ擇ハズ演説講話ニ志アル者ハ勿論苟モ佛教ヲ奉ズ者ハ速ニ御購讀アレ其好評ヲ博センコトハ世人之ヲ知ル豈敢テ茲ニ本館ノ贅言ヲ要センヤ

●改悔文大意

正價金五錢
郵税金二錢

此書は吉谷覺壽擬講が今日の眞宗信徒の法則を失ひ宗軌に違背するもの多きを以て之をして安心を正からしめ報謝師德法度の道を明らかならしめんか爲に分り易く書き示したる良本なり

眞宗講師南條伸興序文
同副講師占部觀順編輯

●淨土三部經科本

全三冊小本
薄葉摺一冊

正價金四拾錢
郵税金四錢

●安心評義辨金剛針

全一冊

正價金拾錢
郵税金貳錢

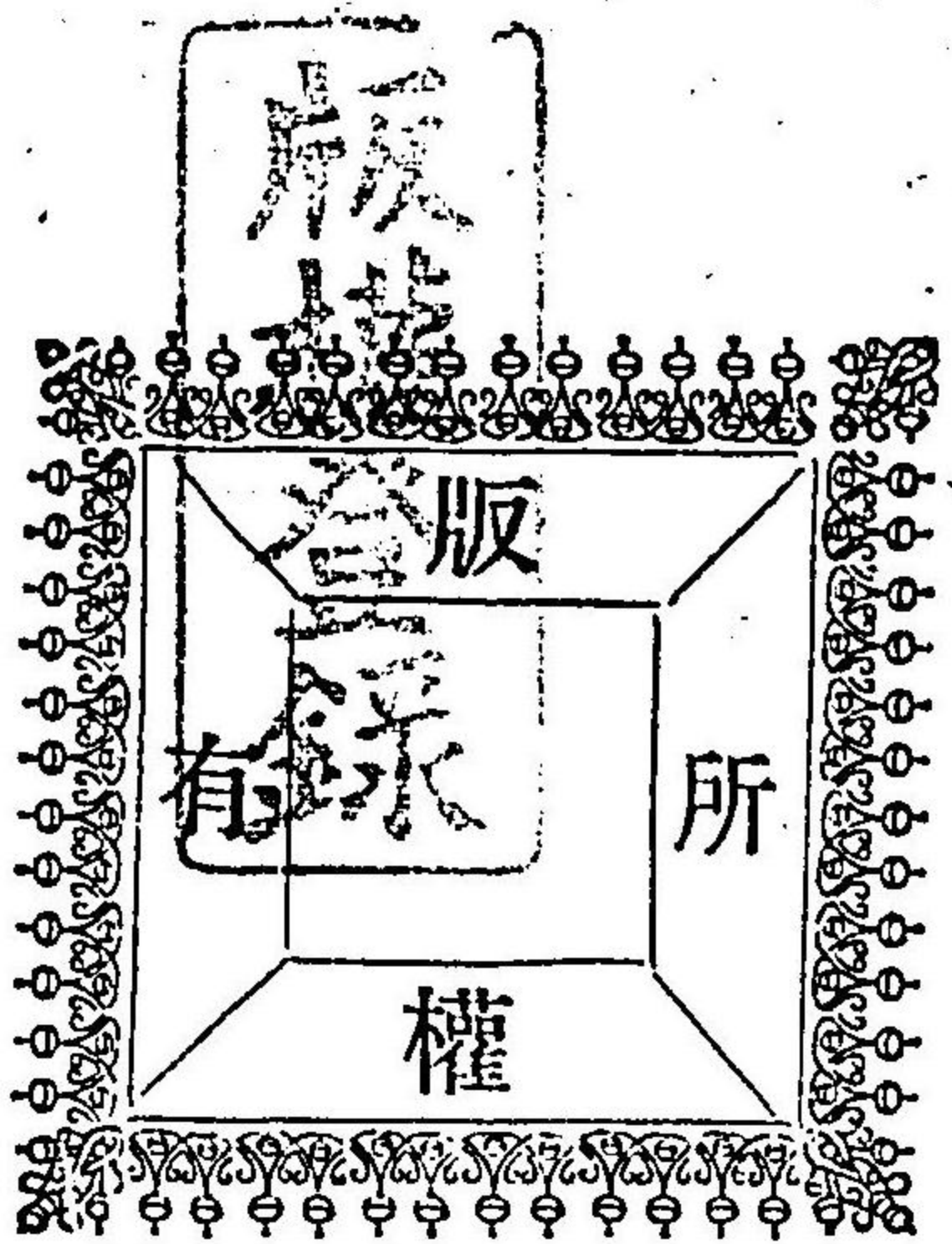
抑モ此書ハ眞宗大谷派占部觀順副講師明治廿四年六月其尊命ヲ蒙ラレシコトハ越前國佐々木徹周嘗テ安心評義辨ヲ著シテ師カ改悔文集說ヲ評破シ加之念佛者不似合ノ暴言ヲ吐キ人機ヲ煽動セ令ム茲ヲ以テ問此岐路ニ迷イ或ハ其黨派ニ陷ルモアリ皆人ノ深ク杞憂スル所ナリ今ヤ之ニ對スルニ斯書アリ議論ノ精確ナル金剛ノ如ク駁撃ノ適當セル砭針ニ劣ラス進テハ彼カ邪義ヲ摧キ退テハ本宗ノ正義ヲ示ス恰モ黒雲破レテ天日顯ル、カ如シ爰ニ留學生榊原芳雄ナル人護法顯正ノ爲ニ編輯セラレタル一大良書ナリ今般當館ニ於テ之ヲ印行シ以テ流布ノ廣遠ヲ謀ル冀クハ眞宗ニ流テ汲ム人ハ陸續購讀シ玉ハンコナ

發行所

京都市東六條中珠數屋町
烏丸東エ入二十人講町

西村法藏館

明治二十五年八月十七日印刷
同年同月十八日出版



編輯者 愛知縣平民

多田了和

愛知縣三河國寶飯郡
赤坂村無番戶

京都府平民

西村七兵衛

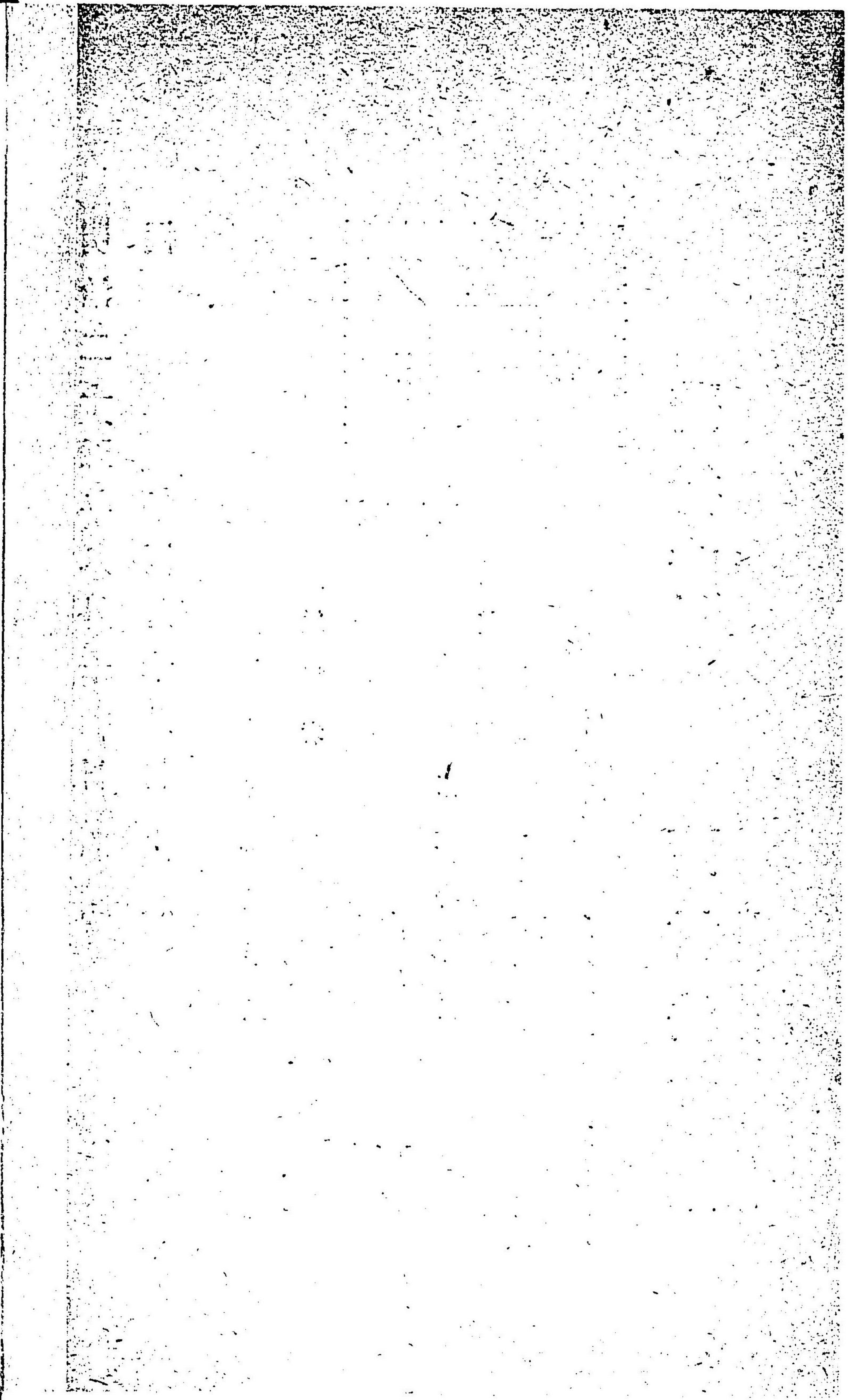
京都市下京區中珠數屋町通
烏丸東入廿人講町廿二番戶

印刷者兼

發行所

西村法藏館

京都市東六條中珠數屋町



[Redacted]

特 5 1

473

大家說教演說

国立国会図書館

015908-000-1

特 5 1-473

大家說教演說

多田 了知/編

M25.8

ABC-1720

